

シンポ III

5. 循環器専門の立場から

桑原 洋一 増田 善昭

(千葉大学医学部第三内科)

心臓核医学領域においては、とくに近年循環器関連の新しい放射性医薬品の臨床応用が可能になり、解析コンピュータの性能向上に伴い3次元描出や心電図同期法など解析手法の発展も手伝ってSPECT, PETの進歩には著しいものがあり、その適応範囲はきわめて拡大した。こうした新しいトレーサや手法を用いた核医学的検査により、心筋における特定の機能や代謝の低下などの病態が示されることなどは非常に興味ある所見であり、最近の知見では、その集積が心不全等の疾患の治療効果を反映したり、予後に関連することが報告され臨床的にも有用と思われるデータが次々に報告されている。

一方、大学病院のような一部の研究施設を除けば血流製剤による負荷心筋シンチグラフィ一辺倒の施設が多く、アンギオグラファーや心臓外科医をはじめ一般循環器臨床医にとっては心筋血流の情報から得られる虚血の診断と viability の検出以外は利用されていないというのが現実である。その理由として、十分な啓蒙がなされていないという

こともあるが、核医学検査結果より得られる情報が心エコーのようなごく一般的な非観血的検査で得られる情報の域を出ないものであったり、タイムリーに診療方針に直結するものでない場合も少なからずあり、核医学的検査の費用が高額であること、被曝が避けられないことを考えれば多くの施設で新しいトレーサや手法を用いた検査が行われていないこともうなずける。

最前線の循環器臨床における核医学のはたす役割は、診断および治療の decision making (戦略決定) に寄与することであり、そこでは核医学検査による情報が他の modality より safety (安全性), reliability (信頼性)そして validity (妥当性)において優れていることが要求されるであろう。さらに検査費用を加味した上で cost effective (経済的)であることが望まれる。本シンポジウムでは、こうした観点からこれまでの conventional な検査法、新しいトレーサや心電図同期法などの新しい解析手法を検証し、さらに今後臨床の場でどのような情報が核医学に望まれるかを考察する。